

本日は10月最初の日曜日であります。日本基督教団では10月第一日曜日を「世界聖餐日・世界宣教の日」と定めています。その謂われは、1930年代にアメリカの長老派教会で始まり、現在はカトリックとプロテスタント諸教派が相互の違いや多様性を認め合い、分断や対立から一致へと向かう超教派運動として世界中で行われています。世界中の多くの教会が私たちと同じように聖餐を行っていることを改めて意識すると、神の御業は全世界に広がっているとつくづく思われるものです。

私はドイツ在住時代、聖餐式に関して印象深く心に残っている出来事があります。ヨーロッパ中から集まる国中挙げての大きな集会で首相も参加する、Kirchentag・キルヘンタークという教会大会、所謂、教会のお祭りのようなものが2年に一度、ドイツの主要な都市で順繰りに開催されています。2017年・宗教改革500年記念の時、ベルリンで行われた時のことです。その際、聖餐式に与りましたが、この時ほどイエス様によって世界が「一つ」とされていると、実感したことはありませんでした。何千人もの人々が参加しているために、グループに分けて配餐されました。その際、「これは、あなたの為に裂かれた肉です。」「これは、あなたのために流された血です。」と宣言され、パン、ぶどう液が隣の人から手渡され、またそれを隣の人へと同じようにして渡してゆくというやり方です。何処の国の方かも分からない初めて出会った人々が、イエス・キリストの十字架によって一つとされているという感動を覚えました。それは、国・人種・教派の違いを超えた神の家族の姿でした。

聖餐の由来

さて、先ほど読まれた聖書の箇所は、世界中の教会が聖餐式の度毎に読まれているもので、由来は最後の晩餐からきています。イエス様は弟子たちと共におられ、その後にご自分の身にどのようなことが起ころうとしているかもご存じの上で、24,25節に記されている通りです。パンを手にとられ、「感謝の祈り」をささげて弟子たちにこう言われました。『これは、あなたがたのためのわたしの体である。わたしの記念としてこのように行いなさい』。また、杯も同じようにして言われました。『この杯は、わたしの血によって立てられる新しい契約である。飲む度に、わたしの記念としてこのように行いなさい』。

ここに記されている新しい契約とは、神と人との新しい絆です。旧約聖書エレミヤ31:33に記されているように、預言者エレミヤを通して神が語られたことの実現でした。十字架の出来事において、人間の罪のために断絶していた神との関係が修復され、神と人々が結ばれたのです。そうして全世界の代々の教会は聖餐を繰り返し行っています、それは、イエス様の目的があるのです。26節に記されています。「だから、あなたがたは、このパンを食べこの杯を飲むごとに、主が来られるときまで、主の死を告げ知らせるのです」。代々の教会のように、私たちが繰り返し聖餐を行いながら主の死を告げ知らせることを続けていくのです。それが教会なのです。

「主の死を告げ知らせる」とは、イエス・キリストが十字架にかけられて死んだということ事で、この世界の罪、私たちの罪を告げ知らせることを意味します。しかしもっと大切なことは、「主の死」は、私たちに対する神の愛を指し示しているのです。御自分に背いたこの世界の罪を贖うために独り子を犠牲にされたのです。ですから、「主の死を告げ知らせる」とは、神の愛を告げ知らせるといっ

でも良いと思います。

この世界が今もなお神に背を向け続け、暗闇の中に滅びていくようにしか見えますが、決して神から見捨てられないのです。神は私たちを諦めません。創世記 8:21-22 に記されているように、ノアの洪水後、神は重大な決意されたからです。「人に対して大地を呪うことは二度とすまい。人が心に思うことは、幼いときから悪いのだ。わたしは、この度したように生き物をことごとく打つことは、二度とすまい。地の続くかぎり、種蒔きも刈り入れも寒さも暑さも、夏も冬も昼も夜も、やむことはない。」ですから、神はどのように世の終わりまでこの世界をどのような人でも諦めずに関わり続けられ、神の愛を告げ知らせるのです。「主が来られるときまで、主の死を告げ知らせるのです」とは、再びこの世にこられると約束されているイエス様の再臨の時、つまり夜明けの到来です。聖餐式を通してイエス様の再臨への希望、そして、それを待ち望む自らの信仰を確認するわけです。

目にみえない神の愛

このように聖餐は、目に見えないキリストの恵みを目に見える形で表したものです。私たちはこのことにより、同じ目に見えない信仰や服従を、パンやぶどう液を頂くという行為で、目に見える形で表わすのです。本来私たちは、聖餐に相応しい者ではありません。当然の権利と思って胸を張って聖餐に与る方はおられる方はいないと思います。自分の罪の故に自己を嘆きながらも、「有難たい」と感謝し、尚も数々の自分の弱さもキリストの苦難と死とをもって拭われることを信じ、自らの生活を改めたい、と切望しているのではないのでしょうか。そのような私たちを憐れんで恵んでくださる神の愛によって、本来相応しくないものを、相応しいものとしてくださったキリストの恵みを信じて、感謝してこれから聖餐に与ります。

今、私たちは神の恵みの招きによって集っています。この聖餐に共にいてくださる神の恵みが私たちを相応しい者へと変えてくださいます。聖餐に与る毎にその恵みを、さらに深く体験してゆくのです。神の愛と恵み、そしてイエス・キリストの苦難を再確認する時であり、希望と信仰の活力を与える大切な聖餐ですから、毎回、新たな思いをもって聖餐に臨みたいです。

終わりに

私たちはイエス様を信じた時に、神の子として生まれ変わります。これを「新生」といいます。子どもが家族から離れて一人で生きてはできません。兄弟姉妹の交わりの中で神の子として育てられていく恵みが教会です。イエス・キリストの十字架を信じておられる方々は、まず洗礼を受け神の家族の中に加わっていただきたいのです。そして、神の家族の食卓である聖餐に与って頂くことが教会の祈りです。イエス・キリストが十字架の上で流してくださった血によって私たちの罪が赦され、一方的に神様の前で「よし」とされたこと。イエス・キリストが一度死んだ後、よみがえられたように、生き方が新しくされ、私たちがイエス・キリストを頭とする、教会という愛の信仰共同体の一員となります。教会はそのことを心から祈っています。